

解剖される『史記』

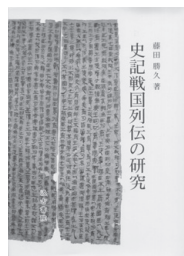
柴田 昇

『史記』と司馬遷については既に膨大な量の先行研究が積み上げられている。そして近年出土資料が急増している中でもその史料的价值は揺らぐことはなく、出土資料の存在を前提とした新たな段階の『史記』研究が生み出されているし、これからも生みだされ続けるだろう。その中で、近年の日本における『史記』研究のトップランナーの一人が藤田勝久氏であることに異論を唱える向きはあるまい。

水利組織、軍制、交通と通信、郡県社会の実態など、戦国秦漢期に関する藤田氏の研究領域は多岐にわたり、既に『中国古代国家と郡県社会』（汲古書院、二〇〇五）、『項羽と劉邦の時代——秦漢帝国興亡史』（講談社選書メチエ、二〇〇六）、

『中国古代国家と社会システム——長江流域出土資料の研究』（汲古書院、二〇〇九）といった各分野の専著が世に問われている。これらの研究成果とリンクしつつ一貫して展開されているのが資料論、特に中国古代史研究の基本資料たる『史記』の資料論である。

藤田氏による『史記』関連論文は二十篇を優に越えている。既にその一部は大作『史記戦国史料の研究』（東京大学出版会、一九九七、中文訳、上海古籍出版社、二〇〇八）にまとめられ、そこでは本書の内容と直接かかわる、『史記』とその素材と見られる資料との比較が行われている。また『司馬遷とその時代』（東京大学出版会、二〇〇二）は司馬遷の生涯を歴史的背景を含めて全面的に再構成した

藤田勝久著
史記戦国列伝の研究

A5判 314頁
汲古書院 [7350円]

もの、『司馬遷の旅——『史記』の古跡をたどる』（中公新書、二〇〇三）は司馬遷の旅行経路を藤田氏が実際に踏破した記録である。そして司馬遷の全旅行を追体験するほどの情熱を背景に次々と発表され続けてきた藤田『史記』論の最新の成果が、本書『史記戦国列伝の研究』なのである。

本書は序章と終章を含む六つの章からなり、最後に「『史記』列伝の素材」「戦国略年表」の二つの表が付されている。各章の原型となった論文には二〇年以上前に発表されたものもあるが、それぞれ近年の研究状況・出土資料状況をふまえた改稿・増補がほどこされている。『史記』

の中で列伝は、歴史の中の人間と社会が生き生きと描き出された、読んで最も面白い部分といつてよい。本書は、その列伝がどのような材料から成り、それらの材料がどのような脈絡で配列されているかを明らかにすること、換言すれば『史記』を素材レベルまで腑分けすることを通じてその構造を理解することを基本的な目的とする書物である。以下、本書の内容を概観していこう。

序章「戦国、秦代出土史料と『史記』」では、漢代の資料状況の全体像とその中で『史記』編纂にあたって利用された資料／利用されなかった資料のそれぞれの性格が論じられる。本論は以下の四つの章で構成され、それぞれ個別の列伝ないしは類似性のある列伝グループが検討の対象とされる。

第一章 『史記』諸子列伝の素材と人物像

第二章 『史記』穰侯列伝の編集方法

第三章 『史記』蘇秦・張儀列伝と史実——戦国中期の合従と連衡

第四章 『史記』戦国四君列伝の史実
序章～第四章を通して得られる『史記』像及び戦国列伝像の要点を評者なりに整理すれば次のようになるうか。

①『史記』列伝の諸篇からは、ア、紀年資料がなくほぼ記事資料だけで構成、イ、紀年資料と記事資料の組み合わせ、の二つの編集パターンが見出される。

②『史記』編集時に素材とされた資料は、漢代まで伝えられる過程である程度の編集を経て書籍の形態にまとめられていたものが中心である。また太史令が所属し祭祀儀礼などを司る漢の太常の職務に関係する資料が多い。逆に、行政・法令・財務・裁判等に関わる資料はあまり使用されていない。

③従来『史記』の資料収集・作成については司馬遷の旅行取材が重視されてきた。しかし『史記』の記事中における情報分布状況は司馬遷の旅行経路に必ずしも対応しておらず、司馬遷が旅行したはずなのに著しく情報量の少ない地域が存在する。また旅行の主目的も著述のため

の資料収集とは考え難い。司馬遷の旅行の見聞は主に論贊に記され、人物評価に生かされている場合が多いと考えられる。

④『史記』戦国列伝における編年の基本となっているのは秦紀年で、一部に趙紀年が使用されている。全体として、秦国とその周辺に関係の深い人物には紀年資料が多く、これらは比較的史実に近いものと考えてよい。逆に紀年資料が少ない人物の列伝は信頼性に問題がある可能性がある。

⑤記事資料は戦国故事（歴史的事実を踏まえたもの）と説話（物語的資料）に大別される。また戦国故事の中にも、書信や奏言の様な資料に近く事実性の高いものと、原資料が組み合わせられて複雑化した説話に近い性格を持つものがある。列伝に使用されているこれらの記事資料は基本的に先行する文字資料に拠るもので、司馬遷によって創作されたと考えられる記事は少ない。

⑥司馬遷は列伝編集にあたり事績の配列によってその人物に対する評価を示そ

うとした。また司馬遷には国家の興亡、人物の盛衰の原理を示そうとする意図があり、『史記』戦国列伝には各人物の事績を「登場―全盛―失脚・滅亡」という記事配列パターンで示すものが見出される。

終章「『史記』の歴史叙述と戦国史」では、本書の議論が藤田氏のこれまでの研究の中に位置づけられ、その上で本書全体のまとめがなされる。そして本書が、藤田氏の史記研究の三つの段階、すなわち、

(1)『史記』とその種本に当たる資料とを比較する

(2)司馬遷が利用したもの以外にも含む漢代文字資料の全体的なあり方の中に『史記』の素材・編集を位置づける

(3)考古遺跡調査・フィールド調査による情報を取り入れる

という各段階を経て、その上であらためて『史記』戦国列伝を考察したものであることが示される。

この他に本書では、『史記』そのもの

の分析以外に、要所要所で戦国史や出土資料に関する氏の立場・見解が披瀝され、蘇秦・張儀の外交官的性格、戦国期における郡県制と封建制の二重体制による国家形成の進展、戦国封君領と漢代諸侯国の類似性、戦国七国の地域的特質などに関する言及がなされている。また終章では、戦後日本の中国古代史研究をリードしてきたいわゆる「秦漢帝国論」を構成する諸研究に対しての批判的考察もなされており、氏の『史記』研究が、『史記』という一つの文献への関心だけによるものではなく、戦国秦漢期における国家・社会の全体像の解明という大きな課題の中に位置づけられていることが垣間見える。

このように、本書は膨大な資料収集に支えられ幅広い視野を持つ、日本における『史記』研究の重要な成果の一つと言える。しかし言うまでもないことだが、『史記』は五帝の時代から司馬遷が生きた前漢中期までの長い時代を扱った通史である。本書の分析対象は基本的に戦国

期の人物の列伝に限定されているけれども、そこで示された分析の方法は当然『史記』の他の部分にも応用可能であろうし（既に付表「『史記』列伝の素材」にその一端が見出される）、『史記』という書物をトータルに理解するためにはそのような作業は必須の過程でもあるだろう。藤田氏自身、終章で『史記』の性格を位置づけたあとに、新しい中国古代史を再構成することが目標（二三三頁）と述べている。本書の成果の上に、より全体的な『史記』の見取り図と既存の枠組みを超えた精緻な戦国秦漢時代像が提示されるのはそう遠い時期ではないものと評者は推測しており、その日を刮目して待ちたいと思う。

（しばたのぼる 愛知江南短期大学）

